

# 日本語母語話者のスピーチにおける聴衆志向表現

櫻田 怜佳

キーワード：パブリック・スピーチ、日本語スピーチ、インターアクション、聴衆志向

## 1. はじめに

現代日本社会では、人々が「公の場で自分のアイデアを語り、他者に広める」(Lucas, 2012) パブリック・スピーチの機会とその重要性が増し、自分の考えを他者に発信する能力を高めることが要請されている。効果的なスピーチを行うためのノウハウを教示する書籍が毎年のように数多く出版され、学校では初等教育から「話すこと」の学習としてスピーチ活動が取り入れられ、発信能力の育成に力が注がれている。その指導においては、英語のスピーチの方法が事実上のスタンダードとされ、英語母語話者によるスピーチの方法が模範とされることが多い。一方、多くの日本語母語話者が実際に行うスピーチは、英語のスピーチとは「語り方」が異なることが知られていながら、未だ言語的特徴を科学的に研究されないまま、低い評価が与えられ、軽視されているという現状がある。

日本語母語話者のスピーチの方法を解明するための一つの考察として、本稿では、聴衆に強く意識を向けていることが読み取れる聴衆志向の言語表現を分析する。スピーチは、話者が一貫して発話の権利を所有することから、多くの場合、話者が聴衆に対して一方向に語りを行う「モノログ」として範疇化されるが、実際に行われたスピーチの談話を分析すると、スピーチは話者一人で完結するものではなく、聴衆の様子に配慮して発話内

容を調整しながら行われる、話者と聴衆の間で成り立つ「インターアクション」であると考えられる。このような観点から、本稿では、日本語母語話者のスピーチにおいて頻繁に観察される2つの聴衆志向の言語表現を取り上げ、これらの言語的特徴が話者と聴衆の間に繋がりや「情意的共通基盤 (affective common ground)」（Cook, 1992）を醸成し、スピーチをインターアクションとして成り立たせることに寄与していることを論じる。

## 2. 先行研究

パブリック・スピーチの言語研究は、修辞学、文体論、談話分析などの分野において、説得力のあるスピーチを行うために話者はどのような言語的特徴を使っているかという観点から数多くの研究がなされている。これらの研究では、欧米の話者が、聴衆からの支持を得るためや、聴衆の記憶に残るスピーチを行うために、いかに言語表現を工夫して戦略的に語りを行っているかということが明らかにされている。

Heritage and Greatbatch (1986) は、イギリス議会における476の政治演説において聴衆から拍手が起きている場面に着目し、その直前に話者が行っていた発話の言語的特徴を分析することを通して、聴衆の拍手を誘発した発話の約7割には、特定の7種類の修辞的技法 (rhetorical device) が使われていたことを明らかにした。それは、①対比 (contrast)、②列挙 (list)、③問題の提示と解決 (puzzle-solution)、④見出しとさわり (headline-punchline)、⑤組み合わせ (combination)、⑥ポジションの提示 (position taking)、⑦追求 (pursuit) の7種類である。話者は、これらの言語的なテクニックを使って、聴衆を引き込み、説得力を生み出しながら、聴衆からの支持を得ることに成功している。Heritage and Greatbatch (1986) をはじめとする研究により、欧米のスピーチで用いられる修辞的技法のパターンが明らかにされてきた。

しかしながら、日本のスピーチの在り方を考えるとき、先行研究には未だ解決されていない2つの問題があると考えられる。一点目の問題は、日

本語のスピーチにおける言語的特徴を明らかにする研究が十分に行われてきていないことである。日本では、欧米のスピーチの方法が賞賛され、欧米の政治家や著名人が行うスピーチにおける言語的特徴の解明には多くの力が注がれてきたが、英語と日本語のスピーチの方法に違いがある事実は多く指摘されているながら、学術的な検討は未だ十分ではない。日本語母語話者のスピーチは欧米のスピーチと比べて劣等なものとして捉えられたり、スピーチの伝統が欠如していると否定的に評価されたり、実践や能力の不足に起因する例外的なものとして扱われることが少なくない。しかし、日本語母語話者が行うスピーチは、不可解なものとして軽視するのではなく、言語文化による多様性の一つとして捉え、英語と日本語のスピーチでは期待される形や好まれる方法が異なるという視点を持つことが求められる。宇佐美(2001)は、スピーチの方法には言語文化による多様性があることを示唆するとともに、日本語教育の立場から、日本におけるスピーチの在り方に関して「日本語による情報発信・自己表現のための効果的な学習方法を提示できないままである」(ibid: 38)と問題を提起し、日本語のスピーチの方法を科学的に明らかにする必要性を主張している。

二点目の問題は、これまでの研究では、スピーチは話者から聴衆への一方向的な語り(モノローグ)であると捉えられ、聴衆を説得するための「戦略」や「テクニック」としての修辭的技法に焦点が当てられてきたため、スピーチを話者と聴衆のインターアクションとして見る視点が十分に持たれてこなかったことである。話者が聴衆の様子に配慮しながらどのように聴衆と関わりを持つ工夫をしているかを見ることによって、先行研究では分析対象の網目から零れてしまっていた日本語のスピーチをインターアクティブにすることに寄与している言語的特徴を的確に捉えることができると考えられる。

### 3. データと分析方法

本研究は、TED (Technology, Entertainment, and Design) 及び TED か

ら認証を受けた団体が開催する講演会におけるスピーチの映像 (TED Talks) をデータとして使用する。TED Talks は、広める価値のあるアイデア (ideas worth spreading) を共有するというコンセプトのもと、幅広い職業や年代の人々が登壇し、自分の経験や知識を 18 分程度で語るものである。TED から認証を受けた団体が主催する「TEDx」は、年間 3000 以上のイベントが世界各地で行われている。本研究は、TED Talks のうち、東京で開催された「TEDxTokyo」(2012 年と 2013 年) に登壇した 12 名の日本語母語話者による日本語のスピーチをデータとして利用し、スピーチを話者と聴衆のインタラクションであると捉える観点から、話者がどのように聴衆と関わりを持つ工夫をしているかについて分析を行う。<sup>1</sup>

#### 4. 分析結果

日本語母語話者による日本語のスピーチ 12 本を分析した結果、すべてのスピーチにおいて、2 つの聴衆志向の言語表現が頻繁に観察された。それは、(1) 終助詞「ね」と (2) 文末表現「のだ」である。

##### 4.1 終助詞「ね」の使用

本研究の分析対象である 12 本すべてのスピーチにおいて終助詞「ね」が使用され、合計 259 回 (1 人あたり約 22 回) 観察された。終助詞「ね」は、聞き手に共感や同意を求め、「話し手と聞き手に共通認識領域を作り出すもの」(伊豆原, 2003: 13) とされている。スピーチにおいて、終助詞「ね」の使用は、話者と聴衆の間に共通基盤を構築することを通して、話者が聴衆に意識を向け、インタラクションを志向していることを伝えるサインとしてはたらいっているといえる。

例 (1) は、廃プラスチックを石油に戻すことで資源再利用に貢献する装置の開発者が、実際に油化装置を持参し、聴衆の前で実演を始めようとする場面である。話者は、「魔法の液体」によってこれから何が起こるかを聴衆が見逃さないよう、聴衆に対して共同注視を求める際に、終助詞「ね」

を使用している。

(1) これ開発中の魔法の液体を持ってきました。いいですか。見て  
てくださいね。

(伊東昭典 “Liquid Power”)

例 (1) は、終助詞「ね」を使わずに「見てください」とだけ発話することも可能であるが、終助詞「ね」を付与することによって、聴衆をこれから起こる出来事を一緒に体験する参加者の一員として引き込み、話し手と聞き手との間に一体感を醸成しているといえる。Cook (1992) によれば、終助詞「ね」は、話し手と聞き手の間で共有された感情としての「情意的な共通基盤 (affective common ground)」を指標するものである。終助詞「ね」が使われるたびに話し手と聞き手の間に共有された感情が引き起こされ、聞き手を積極的で感情的にサポートする存在として会話に参加させる効果を持つ (ibid: 519-520)。例 (1) で見られた終助詞「ね」は、これから起こる出来事 (魔法の液体を使った実験) を聴衆にぜひ一緒に体験してほしいと願っている話者の感情を伝え、情意的な共通基盤を構築している。さらに、このスピーチにおいて例 (1) 以降の発話の中にも何度も現れる終助詞「ね」によって、共有された感情が再び呼び起こされ、話者と聴衆の間の繋がりがより強固なものになっていくことが考えられる。

例 (2) は、棋士である話者が、将棋を指すときにどのような思考プロセスを辿っているかについて語るスピーチの中で、「じり貧」という局面における対応を説明する場面である。終助詞「ね」が、発話の途中に頻繁に現れていることが見て取れる。

(2) じり貧っていうのはちょっと聞きなれない言葉かもしれませんがけれども、例えばですね、ま、時間がかかるけれども、あるいは手数がかかるけれども、望みがない局面、勝ち目がない局面のことをじり貧って言うんですね。で、その鳥瞰する俯瞰する方法を使って、この

場面での選択肢を選んでしまうとじり貧に陥ってしまうということがわかればですね、例えリスクが高くても、他の選択肢を選ぶということもできるというふうに思うんです。で、まあそういうその感覚的なもの、またロジックの積み重ねのものというのを車の両輪のようにですね、繋ぎ合わせて考えていく。場面場面、状況状況に応じてやっていくという方が非常にですね、こう躊躇いなくあるいは躊躇なく選択をしていくというためにはですね、非常に重要なんではないかなというふうに思っています。

(羽生善治 “Take small risks and pay attention to coincidence”)

例(2)は、「ちょっと聞きなれない言葉かもしれませんが」という発話から始まっていることから、話者は、これから話す「じり貧」について、聴衆が情報を共有していない状況であることを認識し、それを伝えることによって、聴衆に配慮し、寄り添う態度を表している。この発話の後に、聴衆が知識を持っていないと思われる「じり貧」について説明をしていく中で、一つずつ情報を伝えるたびに終助詞「ね」を使用して、聴衆に意識を向け、繋がりを示し続けている。森田(2008, 2017)によれば、このように発話の継ぎ目に現れる終助詞「ね」は、「発話の産出過程であっても「受け手と同じ軌道で繋がっているか」という「協調」の問題」を取り立てることによって(森田, 2017: 160)、「行為がインタラクティブに達成されるための基盤を整える」資源となる(森田, 2008: 53)。例(2)において、短時間のうちに何度も観察された終助詞「ね」の使用は、聴衆が持っていないであろう知識を語る際にも聴衆が話者から離れていくことのないよう「積極的に参加させ」(Cook, 1992: 520)、「同じ軌道で繋が」っていることに重きを置いていることが示唆される。

また、その場で起きた予期せぬ事態に対して話者が即興的に発することには、終助詞「ね」の使用が多く観察された。例えば、話者の背後にあるスクリーンに映し出されたスライドについて、話者が想定していたスライドとは異なるものが表示されてしまったり、スライドの順序が入れ替わっ

てしまっていた場合、話者は、「あ、ごめんなさい」などの謝罪表現を使用するほか、例(3)のように、その場で起こっている状況をありのままに説明し、その発話には終助詞「ね」が使用される。

(3) ちょっとスライドが逆になってますね。

例(3)のような発話は、スピーチの本筋からは外れるため、聴衆がスピーチの内容を理解するためには必要のない発話であるが、状況を説明しないでそのまま進めてしまうのではなく、その場に参加している聴衆と即興的なやりとりを行い、終助詞「ね」を伴って話者と聴衆の間に「情意的な共通基盤」を構築しながら、このようなトラブルにおいても聴衆との繋がりを作りだし、スピーチを進めているように見て取れる。

このように、日本語のスピーチにおいて、終助詞「ね」は、話者が聴衆に意識を向けていることを示し、スピーチ全体を通して何度も話者と聴衆の間の繋がりを作りながら、スピーチをインターアクティブなものにしているといえる。

#### 4.2 文末表現「のだ」の使用

本研究の分析対象である12本すべてのスピーチにおいて文末表現「のだ」(「のです」、「んです」)が使用され、合計284回(1人あたり約24回)観察された。「のだ」は、直前までの部分を名詞化する形容名詞「の」と助動詞「だ」が結び付いた文末形式である。黒滝(2021)によれば、「のだ」は、話者の「直接経験を表し」(ibid: 201)、話し手の確信に基づいたものであるという証拠性(evidentiality)を指標しながら「聞き手に情報の信頼度を示す」「聞き手志向」(ibid: 189)の表現である。また、今村(2007)は、「のだ」には「直前部分の内容を一つのまとまりとして見つめて聞き手に差し出すような語感がある」とし、「のだ」が発話される際の話者の態度は、「無造作に差し出すのではない。相手に投げかけ、しっかり手渡すイメージ

である」と分析している(今村 2007: 42)。

例(4)は、土を利用しない新しい農業の手法を開発した生体医工学者である話者が、そのテクノロジーの肝要を担うフィルムの素材について語る場面である。

(4) 実はこのフィルムの素材はですね、ハイドロゲルというおむつに使われているゲルです。ものすごく水と栄養素を吸い込みます。ただですね、こちらから、こっち濡れてますよ。こちらから吸っても、こっち側にはですね、ハイドロゲルというのはここカラカラなんです。あの、外には水出さないんです。

(森有一 “Soil-Free Agriculture”)

話者は、フィルムの素材として使用されるハイドロゲルがもつ「水や栄養素を外に出さない」という最大の特性を、聴衆によく知ってもらいたいという強い思いを「んです(のだ)」という形式に込めて伝えている。話者は、例(4)において、自分の持っている情報をただ羅列するように話を進めるのではなく、その場を共有する聴衆に向けて終助詞「ね」や「こちら」「こっち」などの指示代名詞を用いて意識を向け続け、最後に重要な情報を伝えるときに「んです(のだ)」という形式を用いることによって、今村(2007)が指摘するように、「無造作に差し出すのではな」く「相手に投げかけ、しっかり手渡すイメージで」(ibid: 42) 情報を伝えていると見て取れる。

例(5)は、漆芸家である話者が、日本文化としての漆を伝える立場から、日本の工芸は、日常に使用するためのものから美術品として鑑賞するものまで含む非常に範囲が広いジャンルであり、工芸の英語訳とされるクラフト(craft)が表す範囲とは異なるということを語る場面である。

(5) 日本の工芸の文化っていうのは、毎日作るようないわゆるそのクラフトという分野だけではなくて、もっともっと本当に年に一回、一生に一回しか作らないような そういったものもすべて工芸のジャ



ンルに入ります。まして、使うスタイルは、持っても一度も使わない、あるいは美術として鑑賞するもの、こういったものも全部日本では工芸です。それぐらいいわゆる範囲が広いんです。極端に言うと、日本の絵画は屏風ですとか襖ですとか、日常生活の中に絵を描くんですね。要するに、生活の中、日本が、日本人が使うそういうものに美術を投入するっていうのが日本の文化だったんです。

(室瀬和美「漆と日本文化」)

例(5)では、短時間のうちに何度も「んです(のだ)」が使用されており、話者は、日本の工芸の幅広さや奥深さを聴衆によく知ってもらいたいという強い思いを「んです(のだ)」という形式に込めて伝えていると考えられる。

このように、日本語のスピーチでは、文末表現「のだ」の使用によって、聴衆に対して話者の「伝えたい」という強い思いを示し、スピーチをインターアクティブなものにしているといえる。

## 5. 考察

日本語母語話者による日本語のスピーチには、話者が聴衆との繋がりを示し、インターアクションを志向する(1)終助詞「ね」と(2)文末表現「のだ」という2つの言語的特徴が頻繁に観察された。これらの言語表現は、従来行われてきた、説得のための修辭的技法に焦点を当てるスピーチの研究においては、分析対象に含まれてこなかった。しかしながら、実際の日本語のスピーチを観察すると、これらの言語表現が、スピーチにおいて話者と聴衆を繋ぎ、「情意的な共通基盤」を構築する重要な資源となっていることが分かった。井出(2017)によれば、日本語の発話は、命題内容だけでは成り立たず、語用論上、話し手の心的態度を表すモダリティ表現が義務的であり、これらは「話し手が相手をはじめ関係がある人々と繋がっていることを指標している」(ibid: 7)。日本語のスピーチにおいても、こ

これらの聴衆を志向するモダリティ表現は、話者と聴衆との繋がりや一体感を醸成し、スピーチをインターアクティブにするために必要不可欠な資源となっている。これらの聴衆を志向する態度は、英語のスピーチのように、対比 (contrast) や列挙 (list) などの修辭的技法を用いたり (Heritage and Greatbatch, 1986) 聴衆への問いかけや指示などの言語行為を伴い 1、パフォーマンスのようにインターアクションを前景化しながら伝えられるのではなく、日本語のスピーチは、話者の経験や知識などの情報が伝えられる背景において、1本のスピーチ全体を通して聴衆との繋がりを示しながら語りかけるようにインターアクションを続けている。

## 6. まとめ

日本語母語話者のスピーチは、しばしば欧米のスピーチと比べて劣等なものとして捉えられたり、スピーチの伝統が欠如していると否定的に評価されることがあった。本稿では、スピーチにおける言語表現について、欧米のスピーチにおいては主軸となる「説得」のための「戦略」や「テクニク」としての修辭的技法に焦点を当てるのではなく、スピーチを話者と聴衆の間で行われるインターアクションとして捉え、日本語のスピーチを分析した。その結果、日本語のスピーチには、終助詞「ね」と文末表現「のだ」というモダリティ表現が多く観察されることが分かり、これらはスピーチをインターアクティブにする必要不可欠な資源として、話者と聴衆の間に繋がりを生み出す重要な言語表現であることを示した。

本稿の冒頭に、これまでの日本社会において、欧米のスピーチの方法が事実上のスタンダードとされ、日本語のスピーチの方法は軽視されてきた問題を提起した。アメリカ英語と中国語の談話を比較分析した Young (1983) は、欧米の人々は中国語などの東アジアの言語文化の談話スタイルを自分たちとは異なる「不可解 (inscrutability)」なものとして軽視している事実を問題視し、欧米と東アジアでは「話すこと」に向かう態度が異なることを示したうえで、そのような異文化の理解を怠る姿勢は、発話者の

意図や能力を見誤り社会的に深刻な事態を引き起こす可能性がある」と指摘している (ibid: 73)。また、藤井 (2014) は、「日本語や日本人のコミュニケーションが日本人だけに理解されればよいというような内向きの姿勢ではいけない」とし、「日本と同じような文化、思想を持っていても、学問的に声をあげられない環境にある非西洋の人々に代わって、日本からの発信がそれらの人々や文化の存在に気づかせ」「世界には西洋の考え方だけでは説明しきれないものがあるのだという事実を提示」することの重要性を述べている (ibid: 1-2)。本研究は、言語文化によって異なるスピーチにおける「語り方」の多様性の一つとして、これまで欧米のスピーチをスタンダードとすることによってスピーチの分析対象からは捨棄されてきた日本語のスピーチに頻繁に見られる2つの言語表現を取り上げ、それらの表現が、話者と聴衆を繋ぎ、スピーチをインタラクティブにすることに寄与する必要不可欠な資源であると考えられることを論じた。

#### 註

1 英語母語話者と日本語母語話者のスピーチ各12本において使用された問いかけ(疑問文)を分析した櫻田 (2019) は、英語のスピーチは日本語よりも3倍近く多くの問いかけ(英語のスピーチは123例、日本語のスピーチは44例)が観察されたことを明らかにしている。

#### 参考文献

- Cook, Haruko. M. (1992) "Meaning of non-referential indexes: A case study of the Japanese sentence-final particle *ne*" *Text - Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse* 12, 4: 507-539.
- 藤井洋子 (2014) 「国際社会への貢献を目指して」『社会言語科学』16, 2: 1-3.
- Heritage, John and David Greatbatch. (1986) "Generating applause: A study of rhetoric and response at party political conferences." *American Journal of Sociology* 92,1: 110-157.
- 井出祥子 (2017) 「敬意表現と日本文化——「場の考え」からのアプローチ——」『日本語学』36, 6: 2-8.
- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学論叢』51, 2: 1-15.
- 今村和宏 (2007) 「「のだ」の発話態度の本質を探る: 「語りかけ度」と「語りかけタイプ」」『一橋大学留学生センター紀要』10: 37-48.

- 黒滝真理子 (2021) 「エビデンシャリティとモダリティ・アスペクトのインターフェース——「のだ」「ている」を例にして——」『桜文論叢』103: 185–204.
- Lucas, Stephen E. (2012) *The Art of Public Speaking*. New York: McGraw-Hill. (Original work published 1983)
- 森田笑 (2008) 「相互行為における協調の問題」『社会言語科学』10, 2: 42–54.
- 森田笑 (2017) 「相互行為詞—行為と行為の間における相互行為の秩序の交渉を捉える—」『日本語学』36, 4: 152–163.
- 宇佐美洋 (2001) 「これからのスピーチ研究——日本語教育の立場から——」『日本語学』20, 6: 37–47.
- Young, Linda W. (1983) “Inscrutability revisited.” In J. Gumperz (Ed.), *Language and Social Identity*. pp.72–84. Cambridge University Press.